

## IV 普通作物

### 1. 水 稲 (直播水稻含む)

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用 回数	備考
P2	(プロベナゾール) プロベナゾール含有箱粒剤(24%)	育苗箱の苗の上から 均一に散布する。	緑化期～移植当日	1回	
	【Dr. オリゼ等】	側条施薬	移植時	1回	※1
	ファーストオリゼ箱粒剤	育苗箱の床土に均一 に散布する。	は種時(覆土前)	1回	
	オリゼメート粒剤	散布	移植活着後及び出穂 3~4 週間前(但し、収穫 14 日 前まで)	2回以内	
	散布	葉いもちには初発の 10 日 前～初発時、穂いもちに は出穂 3~4 週間前(但し、 収穫 14 日前まで)			
M1	Zボルドー粉剤DL	散布	出穂 10 日前まで	-	
16.2	アチーブ粉剤DL	散布	収穫 14 日前まで	3回以内	
P3	(チアジニル) アプライ箱粒剤	本剤の所定量を育苗 箱の上から均一に散 布する	は種時覆土前	1回	※2
	ブイゲット箱粒剤 (12%)	育苗箱中の苗の上か ら均一に散布する	緑化期～移植当日	1回	
-	(トリコデルマ アトロビリデ) エコホープ	24 時間種子浸漬	催芽時	-	
		24~48 時間種子浸漬	浸種前～催芽前		
	エコホープDJ	24 時間種子浸漬	催芽時	-	
		24~48 時間種子浸漬	浸種前～催芽前		
7	エバーゴル箱粒剤 (2%)	育苗箱の上から均一 に散布する	は種時(覆土前)～移植当 日	1回	※2
11	オリブライト1キロ粒剤	散布	出穂 10 日前まで(但し、 収穫 45 日前まで)	1回	
24	(カスガマイシン) カスミン粒剤	育苗箱には種した種 籾の上から均一に散 布する。	覆土前	1回	
		覆土に均一に混和す る。			
	カスミン液剤	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約 5 リットル) 1 箱あたり希釈液 50 ミリ ットルをは種した種籾の 上から均一に散布す る。	覆土前	1回	
		散布	穂揃期まで	2回以内	
24 + 16.1	カスラブサイドゾル	散布	穂揃期まで	2回以内	
6	キタジンP粒剤	散布	葉いもちに対しては初発 7 日前～初発時、穂いもち に対しては出穂 7~20 日 前	2回以内	

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用 回数	備考
7	(チフルザミド) グレータム箱粒剤 (3%)	育苗箱の上から均一に散布する。	移植当日	1回	※2
16.1	(ピロキロン) コラトップ粒剤 5	散布	葉いもちに対しては初発10日前～初発時、穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで	2回以内	
	コラトップジャンボP	水田に小包装(パック)のまま投げ入れる。	葉いもちに対しては初発20日前～初発時、穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで	2回以内	
	デジタルコラトップ箱粒剤 (12%)	育苗箱中の苗の上から均一に散布する。	移植3日前～移植当日	1回	※2
16.3	(トルプロカルブ) ゴウケツ粒剤 (3%) サンブラス粒剤 (3%)	湛水散布	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	
	トルプロカルブ含有箱粒剤 (9%) 【ゴウケツバスター、ハイパーキック等】	育苗箱の上から均一に散布する。	移植3日前～移植当日	1回	※1
M(他)	シードラック水和剤	24時間種子浸漬	浸種前	1回	
P3	(イソチアニル) ルーチンシードFS	塗抹処理(種子被覆剤を加用)	は種前(浸種前)	1回	
	イソチアニル含有箱粒剤 (2%) 【スタウト、ルーチン等】	育苗箱の上から均一に散布する。	は種時(覆土前)～移植当日	1回	※1
31	スターナ水和剤	10分間種子浸漬	浸種前	1回	
		5～24時間種子浸漬			
32+4	(ヒドロキシイソキサゾール・メタラキシルM) タチガレエースM粉剤	育苗箱土壤に均一に混和	は種前	1回	
	タチガレエースM液剤	土壤灌注	は種時	1回	
		土壤灌注	は種時又は発芽後		
32	(ヒドロキシイソキサゾール) タチガレン粉剤	深さ5～10cmの苗代土壤に均一に混和する。	は種前	1回	稲(畑苗代)
		育苗箱土壤に均一に混和する。	は種前	1回	
	タチガレン液剤	土壤灌注	は種時及び発芽後	2回以内	
-	タフブロック	24時間種子浸漬	催芽時	-	
M5	(TPN) ダコニール粉剤	育苗箱土壤に均一に混和する。	は種前	1回	
	ダコニール1000	土壤灌注	は種時～緑化期(但し、は種14日後まで)	2回以内	
1+M5	ダコレート水和剤	灌注	は種時～緑化期(但し、は種14日後まで)	2回以内	
3+M1	テクリードCフロアブル	10分間種子浸漬	浸種前	1回	
		24時間種子浸漬			
U16	トライフロアブル	散布	収穫14日前まで	2回以内	

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用 回数	備考
3	トリフミン乳剤	10 分間種子浸漬	浸種前	1 回	
		24～48 時間種子浸漬			
U17	(ピカルブトラゾクス) ナエファイン粉剤	育苗箱土壤に均一に 混和する。	は種前	1 回	
	ナエファインフロアブル	土壤灌注	は種時	2 回以内	
16.1 + U14	(トリシクラゾール・フェリムゾ ン) ノンプラス粉剤D L	散布	収穫 7 日前まで	2 回以内	
	ノンプラスフロアブル	散布	収穫 7 日前まで	2 回以内	
7	(メプロニル) バシタック粉剤D L	散布	収穫 14 日前まで	3 回以内	
	バシタック水和剤 7 5	散布	収穫 14 日前まで	3 回以内	
U18	(バリダマイシン) バリダシン粉剤D L	散布	収穫 14 日前まで	5 回以内	
	バリダシン液剤 5	散布	収穫 14 日前まで	5 回以内	
16.1	(トリシクラゾール) ビーム粉剤D L	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
	ビーム水和剤 7 5	散布	収穫 7 日前まで	4 回以内 (但し、本 田期は 3 回以内)	
	ビームゾル	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
6	(イソプロチオラン) フジワン粉剤D L	散布	収穫 14 日前まで	2 回以内	
	フジワン粒剤	本剤の所定量を育苗 箱中の苗の上から均 一に散粒する	苗の緑化始期	1 回	
		湛水散布	葉いもちに対しては初発 7～10 日前、穂いもちに 対しては出穂 10～30 日 前 (但し、収穫 30 日前まで)	2 回以内	
	フジワン乳剤	散布	収穫 14 日前まで	2 回以内	
U14 +	(フェリムゾン・フサライド) ブラシン粉剤D L	散布	収穫 7 日前まで	2 回以内	
16.1	ブラシンフロアブル	散布	収穫 7 日前まで	2 回以内	
P8	(ジクロベンチアゾクス) ブーン箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。 育苗箱の床土又は覆 土に均一に混和する	は種時(覆土前)～移植当 日 は種前	1 回	※2
M3+3	ヘルシードTフロアブル	10 分間種子浸漬	浸種前	1 回	
		24 時間種子浸漬			
		種子吹き付け処理(種 子消毒機使用)又は塗 沫処理			
		24～48 時間種子浸漬			
M1 + 12+3	モミガードC水和剤	24 時間種子浸漬	浸種前	1 回	

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用 回数	備考
7	(フルトラニル) モンカット粒剤	湛水散布	出穂 30～10 日前 (但し、 収穫 14 日前まで)	3 回以内	
	モンカット水和剤 (25%)	散布	収穫 14 日前まで	3 回以内	
3	モンガリット粒剤	湛水散布	収穫 45 日前まで	2 回以内	
20	(ペンシクロン) モンセレン粉剤D L	散布	収穫 21 日前まで	4 回以内	
	モンセレンフロアブル	散布	収穫 21 日前まで	4 回以内	
M1*	ヨネボン	24 時間浸漬	浸種前	1 回	
16.1	(フサライド) ラブサイド粉剤D L	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
	ラブサイドフロアブル	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
7	(フラメトピル) リンバー粒剤 (1.5%)	散布	収穫 30 日前まで	2 回以内	
	リンバー箱粒剤 (4%)	育苗箱の上から均一 に散布する。	移植 3 日前～当日	1 回	※2

・ 殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
3	MR. ジョーカー粉剤D L	散布	収穫 7 日前まで	2 回以内	
4	アクタラ箱粒剤	育苗箱中の苗の上から 均一に散布する	移植前 3 日～移植当日	1 回	※2
4	(イミダクロプリド) アドマイヤー箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	移植 2 日前～移植当日	1 回	
	アドマイヤー水和剤	過酸化カルシウム剤との同 時湿粉衣	は種前	1 回	湛水直 播水稻
	アドマイヤーC R 箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	は種時 (覆土前) ～移植当 日	1 回	
16	アプロード水和剤	散布	収穫 7 日前まで	4 回以内	
4	(ジノテフラン) アルバリン粉剤D L スタークル粉剤D L	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
	アルバリン箱粒剤 スタークル箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	は種時覆土前～移植当日	1 回	
	アルバリン粒剤 スタークル粒剤	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
未分類	アレス箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	は種時覆土前～移植当日	1 回	
4	エクシードフロアブル	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
1	(ベンフラカルブ) オンコル粒剤 5	育苗箱の上から均一 に散布する。	移植前 3 日～移植当日	1 回	
	グランドオンコル粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	移植 3 日前～移植当日	1 回	
1	ガゼット粒剤	育苗箱の苗の上から 均一に散布する。	移植前 3 日～移植当日	1 回	
2	キラップ粒剤	湛水散布	収穫 14 日前まで	2 回以内	
1+2	ギャング粒剤	育苗箱の苗の上から 均一に散布する。	移植 3 日前～移植当日	1 回	
5	スピノエース箱粒剤	育苗箱の苗の上から 均一に散布する。	移植 2 日前～移植当日	1 回	※2

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
1	スミチオン乳剤	散布	収穫 21 日前まで	2 回以内	
1	(BPMC・MEP) スミバッサ粉剤 20DL	散布	収穫 21 日前まで	2 回以内 (但し、 出穂前は 1 回)	
	スミバッサ乳剤 75	散布	収穫 21 日前まで	2 回以内	
4	(トリフルメズピリム) ゼキサロン箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	は種時(覆土前)～移植当 日	1 回	※2
4	(クロチアニジン) ダントツ箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	移植 3 日前～移植当日	1 回	
	ダントツ粒剤	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
9	チェス粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	移植 3 日前～移植当日	1 回	※2
3	(エトフェンブロックス) トレボン粉剤DL	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
	トレボン粒剤	散布	収穫 21 日前まで	3 回以内	
	トレボン乳剤	散布	収穫 14 日前まで	3 回以内	
3	トレボンサーフ	原液を田面水に滴下 又は入水時水口に滴 下	移植後 20 日以降(但し、5 葉期以後)収穫 21 日前ま で	3 回以内	
	なげこみトレボン	水田に水溶性容器の まま投げ入れる	5 葉期以降(但し、収穫 21 日前まで)	3 回以内	
4	バリアード箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	移植前 2 日～移植当日	1 回	
14	(カルタップ) パダン粒剤 4	は種前に育苗箱床土 に均一に混和するか、 又は移植当日に育苗 箱中の苗の上から均 一に散粒する。	は種前又は移植当日	1 回	
		散布	収穫 30 日前まで	6 回以内	
	パダンSG水溶剤	ペーシ肥料に溶かし側 条施肥田植機で施用 する。	移植時	1 回	
28	パディート箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	は種時(覆土前)～移植当 日	1 回	
28	フェルテラ箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	は種時覆土前～移植当日	1 回	
2	プリンス粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	は種時(覆土前)～移植当 日	1 回	
		育苗箱の床土に均一 に混和する。	は種前		
1	マラソン乳剤	散布	収穫 7 日前まで	5 回以内	
28	ヨーバル箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	は種時覆土前～移植当日	1 回	
4	(フルピリミン) リディア箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	移植 3 日前～移植当日	1 回	
	リディア NT 箱粒剤	育苗箱の上から均一 に散布する。	は種時覆土前～移植当日	1 回	

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける(「薬剤抵抗性管理」参照)。

注3) 水田施用農薬は、止水期間を1週間程度とし、水田外への農薬流出防止を図る。

注4) 飼料用イネについては、使用可能な薬剤や使用時期が異なる場合があるので、「(2)飼料用イネ (WCS用、飼料米用)」を参照する。

注5) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

※1 単剤での登録がないので、登録のある混合剤を使用すること。薬剤名欄の【】内は代表的な混合剤の殺菌剤名を示す。

※2 単剤での流通がないので、混合剤を使用すること。

(1) 食用イネ（直播水稲含む）

【種子～育苗期】

病害虫名	防除時期	防除方法	注意事項
種子伝染性病害 ばか苗病 苗いもち もみ枯細菌病 (苗腐敗症) 苗立枯細菌病 イネシンガレセンチュウ		<温湯処理> 1. 種籾を60℃の温湯に15分間浸漬し、処理後は直ちに流水で冷やす。 <温湯処理と生物農薬の体系処理> 1. 種籾を60℃の温湯に10分間浸漬し、処理後は直ちに流水で冷やす。 2. 種籾を催芽時にエコホープD Jまたはタフブロックの200倍液に24時間浸漬する。 — 注 意 事 項 — 1. 温湯処理には専用の温湯処理機を用いる。 2. 塩水選済みの種子を用いる。 3. 塩水選後温湯処理をする際は、発芽障害を回避するために手早く塩水選を行い、その後直ちに処理する。 4. 温湯処理は発芽率を低下させる傾向があるため、できるだけ前年産の新しい籾を使用する。一昨年以上前の古い籾は処理により発芽率が著しく低下する可能性があるため極力使用しないことが望ましいが、使用する場合は事前に発芽率等の調査を行う。 5. 発芽率の低下傾向が大きい品種（「ゆめしなの」、「しらかば錦」など）を使用する場合は注意する。 6. 処理時に籾袋内の温度上昇を早めるため、水量と乾籾重の比率は温湯処理機説明書の指定どおりとする。 7. 処理時は時々籾袋を上下に攪拌し、水温を一定に保つ。 8. 処理後の籾を保存する場合は十分乾燥し、冷暗室で保存する（15℃で6ヶ月は保存できる）。 9. 温湯処理後は健全育苗に努め、温度管理には十分留意する（次項もみ枯細菌病(苗腐敗症)の耕種的対策を参照）。 10. 温湯処理済み籾は処理後、汚染源との接触を避ける。また、他の籾と同時浸種、催芽はしない。 11. 温湯処理と生物農薬の体系処理は各処理の単独処理より、防除効果を高めることができ、ばか苗病の本田での発病に対しても高い効果が得られる。 12. 温湯処理、温湯処理と生物農薬の体系処理は化学農薬と比較して、ばか苗病に対する効果がやや劣るため採種関係圃場では使用しない。 13. エコホープD Jとタフブロックの使用方法及び注意事項は別表1を参照する。	
種子伝染性病害 ばか苗病 苗いもち もみ枯細菌病 (苗腐敗症) 苗立枯細菌病 褐条病	浸種前～育苗期	<育苗期の防除（温湯処理を除く）> 1. もみ枯細菌病（苗腐敗症）の耕種的対策として以下の方法がある。 (1) もみ枯細菌病（苗腐敗症）は30℃を超える高温で発生が著しく増加するため、催芽・出芽温度を28℃に下げる。この場合、32℃催芽・出芽と比較して出芽揃いまでおよそ1日延びる。また、育苗初期（硬化期初期）までは特に温度管理に留意し、30℃以上の高温に長時間遭遇させない。 (2) 無加温平置き出芽方式は、加温出芽と比較し、は種後低温で経過するため、もみ枯細菌病（苗腐敗症）の発生が抑制される。 (3) 有機物含量の高い軽量培土は、粒状培土と比較し、もみ枯細菌病（苗腐敗症）の発生を抑制する。	

病害虫名	防除時期	防除方法	注意事項
		2. 種子消毒（温湯処理を除く）は別表 1 によりいずれかの薬剤を使用する。 3. は種時処理は別表 2 によりいずれかの薬剤を使用する。	

病害虫名	防除時期	防除方法	注意事項
苗立枯病 [フザリウム属菌 ピシウム属菌 リゾープス属菌 トリコデルマ属菌] ムレ苗（ピシウム属菌による急性萎凋症）	は種前、 は種時、 苗の緑化始期	1. 箱育苗の場合、別表 3 よりいずれかの薬剤を使用する。	
苗立枯病 [フザリウム属菌 ピシウム属菌]	は種前	2. 畑苗代の場合、タチガレン粉剤を 1 m <sup>2</sup> 当り 50g あて床土 5~10cm の深さに混和する。	
黄化萎縮病	苗代期より分げつ盛期まで	1. 苗代の灌排水に注意し、深水、冠水を避ける。 2. 浸冠水の場合は早期排水に努める。	1. 本病に感染すると、いもち病に対する感受性が極めて高まるため、排水直後にいもち病防除剤を散布し、いもち病を予防する。



【別表1】種子消毒剤の種子伝染性病害に対する使用方法及び効果

・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和4年11月30日現在）

薬剤の系統	薬剤名	FRACコード	処理方法				対象病害に対する効果					注意事項該当番号
			使用方法	使用時期	使用回数	風乾の要否	ばか苗病 (F)	苗いもち (F)	もみ枯細菌病 (B)	苗立枯細菌病 (B)	褐条病 (B)	
DMI剤及びその混合剤	トリフミン乳剤	3	30倍10分間種子浸漬	浸種前	1	要	○*	○	—	—	—	1,2,3,4,5,7
			300倍24時間種子浸漬	浸種前	1	不要	○*	○	—	—	—	1,2,3,4,5,7
	テクリードCフロアブル	3+M1	20倍10分間種子浸漬	浸種前	1	要	○*	○	○	○	○	1,2,3,4,5,7
			200倍24時間種子浸漬	浸種前	1	不要	○*	○*	○	○	○*	1,2,3,4,5,7
	ヘルシードTフロアブル	M3+3	20倍10分間種子浸漬	浸種前	1	要	○*	○	○	—	○	1,2,3,4,5,6,7
			200倍24時間種子浸漬	浸種前	1	不要	○*	○	○	—	○	1,2,3,4,5,6,7
			7.5倍30ml/乾燥粃1kg、塗沫処理	浸種前	1	要	○*	○	○	—	○	1,2,3,4,5,6,7
モミガードC水和剤	M1+12+3	200倍24時間種子浸漬	浸種前	1	不要	○*	○*	○	○	○	1,2,3,4,5	
オキシリニツク酸	スターナ水和剤	31	20倍10分間種子浸漬	浸種前	1	要	—	—	○*	○	○	1,2,3,4
			200倍24時間種子浸漬	浸種前	1	要	—	—	○*	○	○	1,2,3,4
化合物 無機	シードラック水和剤	M	400倍24時間種子浸漬	浸種前	1	不要	○*	○*	○*	○	○	1,2,3,4
	ヨネボン	M1	100倍24時間浸漬	浸種前	1	不要	—	—	○*	○	○	1,2,3,4,6
生物農薬	エコホープ	—	200倍24時間種子浸漬	浸種前～催芽時	—	不要	○*	○	○*	○	—	1,2,3,4,7
	エコホープDJ	—	200倍24時間種子浸漬	浸種前～催芽時	—	不要	○*	○	○*	○	○	1,2,3,4,7
	タフブロック	—	200倍24時間種子浸漬	催芽時	—	不要	○*	○	○*	○	○	1,2,3,4,7

【効果凡例】 ○\*：効果ある（対象病害に普及済み） ○：効果ある（対象病害に未普及）

—：農薬登録なし

【病害の分類】 F：菌類病 B：細菌病

【注意事項】

1. 種子消毒を行う際は、以下の点に留意する。

- (1) 塩水選済みの種子を用いる。
- (2) 浸種前に行う浸漬処理では、液量比（容量）1：1（粃1kgに対して薬液2ℓに相当）とし、種子消毒開始時には種子袋を揺すりながら薬液に浸す。また、液温は10℃以上とし、薬剤が沈殿しないように浸漬中も1～2回、種子袋を上下にゆすり、薬液を種子粃全体に行き渡らせる。処理後は水洗せず、浸種は停滞水で行い、2～3日間は換水しない。
- (3) 浸種中のばか苗病の被害増大を防ぐため、液温を15℃以上にしない。
- (4) 催芽時に行う浸漬処理では、液量比（容量）は1：2（粃1kgに対して薬液4ℓに相当）とする。
- (5) 浸種と催芽を同時に高温下で行う温水循環式催芽器を利用した場合、細菌病の被害が増大する恐れがある。

- (6) 浸漬処理の場合、同一薬液は長時間処理（24 時間）では 3 回、短時間処理（10 分間）では 7～10 回程度まで再利用できる。この際、薬液が不足しないように留意する。
  - (7) 風乾は 24 時間日陰干しとする。
  - (8) 採種関係圃場の周辺では、県内のばか苗病の発生リスクを低下させるため、DMI 剤およびその混合剤を使用する。
  - (9) 消毒後の残液は農薬廃液処理装置を用いて処理するか、産業廃棄物処理業者に処分を依頼する（特別指導事項参照）。
2. もみ枯細菌病について、以下の点に留意する。
    - (1) 覆土が少ないともみ枯細菌病（苗腐敗症）の発生が助長されるため、覆土は稲が十分に隠れるまで行う。
    - (2) テクリードCフロアブル、モミガードC水和剤、ヘルシードTフロアブル、エコホープは、もみ枯細菌病（苗腐敗症）に対して効果が不安定な場合があるため、耕種的防除対策（催芽～育苗時の適切な温度管理等）の徹底および他剤との体系処理を行う。
    - (3) もみ枯細菌病（苗腐敗症）の発生生態及び防除に関しては、長野県農業関係試験場のホームページ（[https://www.agries-nagano.jp/research\\_result\\_search](https://www.agries-nagano.jp/research_result_search)）に公開されている「採種栽培のためのもみ枯細菌病防除の指針」を参照する。
  3. 薬剤耐性菌対策として、以下の点に留意する。
    - (1) ブロクロラズ剤（スポルタック乳剤、スポルタックスターナSE剤）、ベノミル剤（ベンレート水和剤、ベンレートT水和剤20、ホーマイ水和剤）は県内広域に、ばか苗病の薬剤耐性菌が存在し実用的な防除効果が得られないので、これらの薬剤は使用しない。
    - (2) テクリードCフロアブルおよびモミガードC水和剤は、ブロクロラズおよびベノミル耐性ばか苗病菌に対しても防除効果が高い。ただし、これらの薬剤を型枠条まき及びポットまき育苗で使用する場合は、下記 4. (1) 及び(2)の根上がり対策を十分に行う。
    - (3) オキシリニック酸耐性もみ枯細菌病菌の発生地域では、当面スターナ水和剤の使用を控える。
  4. 根上がり防止のために、以下の点に留意する。
    - (1) 根上がりは、育苗期の高温及び乾燥、培土の水分不足、は種量の過多などの条件で発生が増加し、種子消毒剤や培土の種類によっても発生程度が異なる。基本的な対策として、初期灌水を十分に行うこと、育苗箱を積み重ねて出芽させること、育苗ハウス及び苗代が高温・乾燥状態とならないよう適切な灌水または換気を行うことを心掛ける。
    - (2) 型枠条まき及びポットまき育苗は、ばら播き育苗に比べて根上りが起きやすいので十分注意する。型枠条まきで根上がりが発生した場合には、押し出し板（根渡り対策用）を使用し移植する。
    - (3) DMI 剤は根上りを助長するため、型枠条まき及びポットまき育苗では使用をできるだけ控える。また、通常のばら播き育苗でも根上りの起きやすい土を用いる場合は覆土を多めにし、初期灌水を十分に行い、育苗箱を積み重ねて出芽させる。
    - (4) シードラック水和剤は根上りが起きやすいので、型枠条まき及びポットまき育苗では使用しない。ばらまき育苗で使用する場合は覆土を多めにし、育苗箱を積み重ねて出芽させることが望ましい。この際、出芽がやや遅くなる場合があるが、育苗期間中に生育は追いつくので実用上問題はない。また、薬剤浸漬処理と浸種を同じ容器で行う場合は、浸漬処理後に、容器底面に沈殿した薬剤を洗浄してから浸種する。
  5. DMI 剤は以下の点に留意する。
    - (1) DMI 剤の単剤（トリフミン乳剤）は細菌病の発生を助長する可能性があるため、混合剤を使用する。
    - (2) DMI 剤は初期生育の遅延や葉の変形などを生じることがあるが、実用上問題ない。
    - (3) テクリードCフロアブルは、チウラム剤（ヘルシードT）との混用、又はチウラム剤処理稲との同時浸種は避ける（薬害回避）。
    - (4) ヘルシードTフロアブルとモミガードC水和剤は同一の有効成分（ペフラゾエート）を含む。
  6. ヨネポンは薬害回避のため、以下の点に留意する。
    - (1) 催芽以降に使用しない。
    - (2) 20℃以下で浸漬する。
    - (3) 薬液に沈殿がないようよく攪拌する。
    - (4) 薬液は1回のみ使用とし、チウラム剤（ヘルシードT）との混用及びチウラム剤処理稲との同時浸種は避ける。なお、初期生育の遅延が見られる場合があるが、実用上問題はない。
  7. エコホープ、エコホープDJ、タブブロックは生物農薬で、有効成分が生菌であるため、下記の点に注意する。
    - (1) 開封後はできるだけ早く使用する。有効期限が化学農薬と比較し短いので注意する。
    - (2) 生物農薬は、浸種前浸漬処理に比較して催芽時処理で効果が安定する傾向がある。
    - (3) DMI 剤の加用は避ける。
    - (4) きのか類に対して影響を及ぼす恐れがあるため、きのか栽培施設付近では特に注意する。

- (5) 古い種籾や保存状態の悪い種籾等では発芽不良や生育障害を起こす場合があるので使用しない。
- (6) 有機物含量の高い軽量培土を用いた育苗において種子消毒として生物農薬を使用すると、ばか苗病に対して効果が低下する場合があるため注意する。

【別表 2】は種時苗箱処理する薬剤の種子伝染性病害に対する使用方法および効果

・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和 4 年 11 月 30 日現在）

薬剤の系統	薬剤名	FRACコード	処理方法			対象病害に対する効果					注意事項該当番号
			使用方法	使用時期	使用回数	ばか苗病 (F)	苗いもち (F)	もみ枯細菌病 (B)	苗立枯細菌病 (B)	褐条病 (B)	
抗生物質	カスミン粒剤	24	20g/覆土 10、土壌混和	覆土前	1	—	—	○*	○*	○*	1
			15g/箱、は種した種籾の上から均一に散布	覆土前	1	—	—	○*	○*	○*	1
	カスミン液剤	24	4 倍液 50ml/箱、は種した種籾の上から均一に散布	覆土前	1	—	○	○*	○	○	1

【効果凡例】 ○\*：効果ある（対象病害に普及済み） ○：効果ある（対象病害に未普及）

—：農薬登録なし

【病害の分類】 F：菌類病 B：細菌病

【注意事項】

1. カスミン剤を使用する際は、以下の点に留意する。
  - (1) テクリードCフロアブルによる種子消毒とカスミン粒剤またはカスミン液剤のは種時苗箱処理の体系防除は、もみ枯細菌病(苗腐敗症)、ばか苗病、育苗期のいもち病に対し安定した高い効果が期待できる。
  - (2) カスミンは薬剤耐性菌の出現を防ぐため、使用量、使用濃度を遵守する。また、本田ではカスミン単剤の使用はしない。
  - (3) カスミン液剤は 1 箱 (30×60×3cm、使用土壌約 50) 当り 50ml の薬液が均一にかかるようにノズル、ポンプの圧力等をあらかじめ調整しておく。
2. イソチアニル含有箱粒剤 (スタウト、ルーチン等、別表 4) のは種時処理 (覆土混和、床土混和、覆土前) は、種子消毒剤 (テクリードCフロアブル) との体系処理により、もみ枯細菌病 (苗腐敗症) に対しても防除効果が期待できる。但し、薬剤により登録内容が異なるので確認してから使用すること。

【別表3】殺菌剤の土壌伝染性病害に対する使用方法および効果

・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和4年11月30日現在）

薬剤の系統	FRACコード	薬剤名	育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5ℓ） 1箱当たり 施薬量	使用時期	苗立枯病原菌				ムレ苗防止	注意事項該当番号
					フザリウム属菌	ピシウム属菌	リゾープス属菌	トリコデルマ属菌		
及びメタラキシソキサゾール単剤との混合剤	32	タチガレン粉剤	6g	は種前	○*	○*	—	—	○	1,3
	32	タチガレン液剤	1,000倍液 500mℓまたは1ℓ	は種時	○*	○*	—	—	○	1,3
	32+4	タチガレエースM粉剤	8g	は種前	○*	○*	—	—	○*	1,2
	32+4	タチガレエースM液剤	1,000倍液 500mℓまたは1ℓ	は種時	○*	○*	—	—	○*	1,2
及びその混合剤	M5	ダコニール粉剤	20g	は種前	—	—	○*	—	—	1,3
	M5	ダコニール1000	1,000倍液 500mℓまたは1ℓ	は種時	—	—	○*	—	—	1,3
	1+M5	ダコレート水和剤	600倍液500mℓ または 1,000倍液1ℓ	は種時	○*	—	○*	○*	—	1,3
オキシム系剤	U17	ナエファイン粉剤	8g	は種前	○	○	○	—	○*	1
		ナエファインフロアブル	2,000倍液 1ℓ	は種時	○	○	○	—	○*	1
ジチオラン系剤	6	フジワン粒剤	50g	苗の緑化始期	—	—	—	—	○*	1,4

【効果凡例】 ○\*：効果ある（対象病害に普及済み） ○：効果ある（対象病害に未普及）  
—：登録なし

【注意事項】

- 土壌伝染性病害の防除に際しては、以下の点に留意する。
  - 粉剤は最初少量の土で増量した後、用土に均一に混和する。
  - 液剤、水和剤の場合は、は種時に灌水をかねて灌注する。発病してからの薬剤灌注の効果は劣るため、予防に努める。
  - 用土のpHが高いと発生が多くなるので適正pHに調整する。
  - 苗立枯病およびムレ苗は、一般的に育苗時の急激な温度、湿度の変化、特に極端な低温によって発生が助長されるため、適正な管理を行う。なお、リゾープス属菌は高温、多湿で発生が多くなるので、育苗時の出芽適温を守る。
- 県内の一部で苗立枯病を起こすピシウム属菌にメタラキシルに対する耐性菌が確認されている。この場合タチガレエースM剤を用いても十分な効果が得られない可能性があるため、低温回避等の耕種的対策を徹底する。
- タチガレンとダコニールを含む薬剤（ダコニール、ダコレート）を粉剤同士以外の組み合わせで併用して処理する場合には、薬害を生じる恐れがあるので次の点に注意する。
  - タチガレン液剤とダコニールを含む薬剤の併用は薬害発生の恐れがあるので行わない。
  - タチガレン粉剤とダコニール1000又はダコレート水和剤を組み合わせる場合は、処理時期を5日間程度隔てる。
- フジワン粒剤を使用する場合は、苗の緑化始期に苗の上から均一に散粒し、すぐに灌水する（床土や覆土に混合すると薬害を生じる）

【苗箱施薬、移植時】

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
いもち病 紋 枯 病 苗 箱 施 薬 対 象 害 虫		1. 乾燥種もみ 1 kg 当りルーチンシード F S の 12ml および種子被覆剤（ペリディウム）の 2ml を塗沫処理する。	
いもち病	は種前 (浸種前)	1. 乾燥種もみ 1 kg 当りルーチンシード F S の 12ml および種子被覆剤（ペリディウム）の 2ml を塗沫処理する。	1. コンクリートミキサーやビニール袋等を用いて塗沫処理しする。 2. 薬剤処理した籾は 1 日程度風乾させる。 3. 本処理方法は、育苗方式に依らず一定の薬剤投下量を確保でき、高密度播種育苗栽培においてもいもち病に対する防除効果が高い。
湛水直播栽培の初期害虫 〔ウンカ類・ツマグロヨコバイ〕	は種前 (カルパーコーティング時)	1. コーティングに要するカルパー粉粒剤 16 の 3 分の 1 に、予め 10a 当り 200g になるようにアドマイヤー水和剤を混和し、薬剤層が籾側と外層の間にはさまれるよう湿粉衣する。	1. コーティング処理時に粉立ちした薬剤を吸引しないよう注意する。
側条施肥移植の初期害虫 〔イネミズゾウムシ イネドロオイムシ〕	移 植 時	1. パダン S G 水溶剤を 10a 当り 200g になるようペースト肥料に混合して側条施用する。	1. 苗箱施薬と併用しない。 2. 施肥基準を守る。
いもち病	移 植 時	1. プロベナゾール含有箱粒剤（24%）を 1kg/10a 移植時側条施用する。処理は専用の側条施薬機を移植機に装着して行う。	1. 本処理方法は、育苗方式に依らず一定の薬剤投下量を確保でき、高密度播種育苗栽培においてもいもち病に対する防除効果が高い。 2. 側条施薬機は使用する農薬ごとに吐出量が異なる。側条施薬機メーカーの指示に従い、移植前に薬剤の投下量が 1kg/10a となるよう吐出量を調整する。 3. 側条施薬登録のある混合剤を使用する。

【別表4】 苗箱施薬対象病害に対する使用方法および効果  
・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和4年11月30日現在）

薬剤の系統	主な薬剤名	FRACコード	成分名および含有量	箱当たり使用量	使用時期	対象病害		注意事項該当番号
						いもち病	紋枯病	
抵抗性誘導	Dr.オリゼ箱粒剤	P2	プロベナゾール24%	50g	移植当日	○*		1, 4, 12
	ファーストオリゼ箱粒剤	P2	プロベナゾール20%		は種時(覆土前)	○*		1, 2, 5, 12
	アブライ箱粒剤 <sup>※2</sup>	P3	チアジニル12%		は種時(覆土前)	○*		1, 2, 5, 12
	ブイゲット箱粒剤	P3			移植当日	○*		1, 12
	イソチアニル含有箱粒剤 <sup>※1</sup> 【スタウト、ルーチン等】	P3	イソチアニル2%		は種時(覆土前) ～移植当日	○*		1, 2, 3, 4, 5, 12
	ブーン箱粒剤 <sup>※2</sup>	P8	ジクロベンチアゾクス2%		は種前(床土混和) は種前(覆土混和) は種時(覆土前) ～移植当日	○*		1, 12
MBI-R	デジタルコラトップ箱粒剤 <sup>※2</sup>	16.1	ピロキロン12%	移植当日	○*		1, 6, 12	
MBI-P	トルプロカルブ含有箱粒剤 <sup>※1</sup> 【ゴウケツバスター等】	16.3	トルプロカルブ9%	移植当日	○*		1, 7, 8, 9, 10, 12	
SDHI	エバーゴル箱粒剤 <sup>※2</sup>	7	ペンフルフェン2%	移植当日		○*	11, 13	
	グレートム箱粒剤 <sup>※2</sup>	7	チフルザミド3%	移植当日		○*	13	
	リンバー箱粒剤 <sup>※2</sup>	7	フラメトピル4%	移植当日		○*	13	

【効果凡例】 ○\*：対象病害に普及済み。

※1 単剤では登録がないため、登録のある混合剤を使用すること。【】内は代表的な殺菌剤名を示す。

※2 単剤では流通がないため、登録のある混合剤を使用すること。

【総括注意】

- ・混合剤は薬剤ごとに登録が異なる場合があるので、使用前に農薬ラベルや農林水産省のホームページ等で確認すること。
- 農林水産省「農薬登録情報提供システム」<https://pesticide.maff.go.jp/>
- ・漏水田では使用しない。植付直後に灌水し、田面が露出しないよう水管理する（薬害）。
- ・粒剤は葉の乾いている条件下で散布し、葉上に残った薬剤は払い落とす（薬害）。
- ・軟弱徒長苗に使用しない（薬害）。
- ・移植後の苗箱は水路や河川等で洗わない（危被害）。
- ・薬剤耐性菌の出現を防ぐため、「FRACコード」を参考に苗箱施薬剤と同一系統薬剤の本田での使用は出来るだけ控える。

【注意事項】

1. いもち病を対象とした苗箱施薬剤はいずれも葉いもちを対象としている。
2. アブライ箱粒剤、イソチアニル含有箱粒剤のは種時処理は、極端な低温、高温条件で、ファーストオリゼ箱粒剤は低温で初期生育の抑制等が生じる恐れがあるので、適切な温度管理に努める。
3. イソチアニル含有箱粒剤のは種時処理(覆土混和、床土混和、覆土前)は、種子消毒剤(テクリードCフロアブル)との体系処理により、もみ枯細菌病(苗腐敗症)に対しても防除効果が期待できる。但し、薬剤により登録内容が異なるので確認してから使用すること。
4. イソチアニル含有箱粒剤及びDr.オリゼ箱粒剤の移植当日処理はもみ枯細菌病(穂枯症)にも防除効果が期待できる。
5. は種時処理できる苗箱施薬剤の中で、抵抗性誘導型(FRACコード「P2」および「P3」)の薬剤は育苗期間中の葉いもちに対しては十分な効果が得られないので注意する。
6. ピロキロン含有箱粒剤は葉先枯れを生じることがあるが、実用上問題がない。
7. トルプロカルブ含有箱粒剤は穂いもちまで残効が認められるが、多発が予想される場合は病害虫防除所が発表するいもち病発生予察情報や気象予報等を参考にして追加防除を行う。
8. トルプロカルブを含有する薬剤は耐性菌の出現を回避するために、種子生産圃場での使用は控える。
9. トルプロカルブ含有箱粒剤はサンプラス粒剤(ゴウケツ粒剤)と有効成分が同一である。耐性菌の発生を防止するため、トルプロカルブを含有する薬剤は年1回の使用とし、体系防除を行う場合は別表6を参考にして作用性の異なる薬剤を用いる。
10. トルプロカルブの作用機構はメラニン生合成阻害であるが、MBI-R剤(コラトップ粒剤、ビーム水和剤等)、MBI-D剤(アチーブ粉剤DL)とは作用点が異なり、MBI-D耐性いもち病菌に対しても有効である。また、抵抗性誘導による作用機構も有する。
11. エバーゴル箱粒剤は、魚毒が強いので注意する。また、育苗箱は水路や河川などで洗わない。
12. 高密度播種育苗栽培でもいもち病対象の苗箱施薬剤を育苗箱あたり50g移植当日処理すると、10aあたりの薬剤投下量が減少するため、慣行栽培に比べて葉いもちに対する効果が低下する。当栽培法で苗箱施薬処理を行う場合には、生育期間中のいもち病の発生に注意する。
13. 紋枯病による減収率は成熟期の発病進展部位が高いほど大きくなる。株毎の発病進展部位と減収率の関係の目安は止葉で16～20%、止葉葉鞘で11～16%、次葉～次葉葉鞘で5～8%である。圃場の減収率は、発病進展部位別の発病株率を調査する。当年の発病が多い圃場では翌年も多くなる傾向である。当年の減収を目安として翌年の防除の参考にする。

【別表5】 苗箱施薬対象害虫に対する使用方法及び効果  
・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和4年11月30日現在）

薬剤の系統	薬剤名	IRACコード	成分名および含有量	箱当り使用量	使用時期	初期書虫						中後期書虫				注意事項該当番号
						イネミスソウムシ	イネドロオイムシ	イネヒメハモグリバエ	ニカメイチュウ(第1世代)	ツマグロヨコバイ(病害媒介)	ヒメトビウンカ(病害媒介)	ニカメイチュウ(第2世代)	イナゴ類	イネノト	フタオビコヤガ	
カーバメート	ガゼット粒剤		カルボスルファン3.0%	50g	当	○*	○*	○		△						2
	オンコル粒剤5	1	ペンフラカルブ5.0%	50g	当	○*	○*	○		△						2
	グラントオンコル粒剤		ペンフラカルブ8.0%	80g	当					○*						
フェニルピラゾール	プリンス粒剤	2	フィプロニル1.0%	50g	は～穫	○*	○*	○	○	○	○	○	○	○*	○	2, 5, 6, 7
	キャンング粒剤	1+2	カルボスルファン1.8% フィプロニル0.6%	50g	緑～当	○*	○*	○	○	○	○*	○*	○*	○*	○*	2, 5, 6, 7
ネオニコチノイド	アクタラ箱粒剤※1		チアメトキサム2.0%	50g	当	○*	○*	○		○*						
	アドマイヤー箱粒剤		イミダクロプリド2.0%	50g	当	○*	○*	○		○*						
	アドマイヤーCR箱粒剤		イミダクロプリド1.95%	50g	穫	○*	○*	○		○						3
	ジノフラン箱粒剤 (アルバリン・スターグル)		ジノフラン2.0%	50g	当	○*	○*	○	△	○*	△					
	ダントツ箱粒剤	4	クロチアニジン1.5%	50g	当	○*	○*	○	○	○*	△					
	バリアード箱粒剤		チアクロプリド1.0%	50g	当	○*	○*	○		○						
メソイオン	(トリフルメゾピリム含有箱粒剤)※1		トリフルメゾピリム0.75%	50g	当					○	○*					
	(フルピリミン含有箱粒剤)※2		フルピリミン2.0%	50g	穫	○	○	○	○	○*	○	○				3
	リディアNT箱粒剤		フルピリミン2.0%	50g	当	○*	○*	○	○	○*	○	○				3
スピロジレン	リディアA箱粒剤		フルピリミン2.0%	50g	当	○*	○*	○	○	○*	○	○				
	スピノエース箱粒剤※1	5	スピノサド0.75%	50g	当						○	○				
ピリジンアゾメチン誘導体	(ピメトロジン含有箱粒剤)※1	9	ピメトロジン3.0%	50g	当											1
	チェス粒剤		ピメトロジン3.0%	50g	当											
ネライストキシン	パダン粒剤4	14	カルタップ4.0%	60g	当	△	○*									1
	パディート箱粒剤		カルタップ4.0%	80g	当	○*	○*		○*		△					
	フェルテラ箱粒剤	28	シアントラニプロロール0.75% クロラントラニプロロール0.75%	50g	当	○	○*	○	○	○	○	○	○	○	○*	○
ジアミド	ヨーバル箱粒剤		テトラニプロロール1.5%	50g	当	○*	○*	○	○	○	○	○	○	○*	○*	
	アレックス箱粒剤	未分類	オキサゾスルフィル2.0%	50g	当	○	○	○	○	○	○*	○*	○*	○*	○*	○

【効果凡例】 ○\*:効果ある(対象害虫に普及済) ○:効果ある(対象害虫に未普及) △:効果劣る  
【使用時期】 当:移植当日、は:は種前 穫:は種時(親玉前) 緑:緑化期  
【注1】:通用書虫はワシカ類  
※1 単剤での流通がないので、混合剤を使用すること。  
※2 薬剤毎に使用時期が異なる場合があるので、使用前に農薬ラベルや農林水産省のホームページ等で確認すること。

## 【総括注意】

- ・混合剤は薬剤毎に登録が異なる場合があるので、使用前に農薬ラベルや農林水産省のホームページ等で確認すること。

■農林水産省「農薬登録情報提供システム」<https://pesticide.maff.go.jp/>

- ・漏水田では使用しない。植付直後に湛水し、田面が露出しないよう水管理する。
- ・粒剤は葉の乾いている条件下で散布し、葉上に残った薬剤は払い落とす。
- ・軟弱徒長苗に使用しない。
- ・移植後の苗箱は用水路や河川等で洗わない。

## 【注意事項】

1. パダンはニカメイチュウ第1世代に対して、発蛾最盛期が田植え後20日以内の地域で有効である。
2. イネドロオイムシに対して、プリンス、カーバメート剤（オンコル、ガゼット）の効果が低下した地域では、当面これらの薬剤の使用を控える。アクタラ、アドマイヤー、ギャング、ジノテフラン（アルバリン、スタークル）、ダントツ、フェルテラ、プリンスは、残効期間が長く、効果が高い。
3. ツマグロヨコバイに対して残効期間が長いアドマイヤー、ダントツ、フルピリミン含有箱粒剤は出穂期頃まで発生を抑制する。
4. イナゴ防除は広域で実施すると効果的である。
5. イネツトムシに対しては、6月上旬以前の田植え又は、型枠条まき及びポット育苗では効果が低い場合がある。また、プリンスの0.6%製剤は1%製剤に比べて残効が短いため防除効果がやや劣る。
6. プリンスのは種前～は種時（覆土前）処理は、低温で生育抑制を生じる恐れがあるので、育苗中の温度管理に注意する。
7. プリンスは、魚毒性が強いため養殖田や養魚池の周辺では使用しない。また、育苗箱は水路や河川などで洗わない。



【本田】

<水田施用農薬は、止水期間を1週間程度とし、水田外への農薬流出防止を図る>

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
	<p>葉いもち の初発 10 日 前 ~ 10 日 後</p>	<p>1. オリブライト1キロ粒剤を 10a 当り 1 kg 散布する。</p>	<p>1. 本剤の使用により、葉身に斑点を生じたり下葉に黄化、葉枯れを生じる場合があるが、収量には影響ない。 2. 散布に当たっては水深を 3cm 以上とし、散布後 7 日間は止め水とする。 3. 漏水田では使用しない。 4. 中干し後に使用する場合には、入水翌日以降に処理する。 5. 7 月上旬以降の散布では穂いもちに対する残効が期待できるが、穂いもちの多発が予想される場合には他系統剤で補完散布を行う。 6. QoI 剤は薬剤耐性菌が出現しやすいため、連用を避け、年 1 回の使用にとどめる。 7. 耐性菌の広域拡大を防ぐため、種子生産圃場では使用しない。 8. 1 キロ剤散布の注意事項については総括注意を参照する。</p>
<p>いもち病</p>	<p>葉いもち は初発前 10 日頃 穂、節いも ちは出穂 前 20 日頃</p>	<p>1. オリゼメート粒剤、キタジンP粒剤、コラトップ粒剤 5、フジワン粒剤のいずれかを 10 a 当り 3~4 kg 散布する。 2. コラトップジャンボPを 10 a 当り 10 パック、畦畔から均等に投げ入れる。</p>	<p>1. 予想的に散布した場合に有効である。 2. 散布に当たっては水深を 3cm 以上（パック剤、ジャンボ剤は 5cm 以上）とし、散布後 7 日間は止め水とする。 3. 漏水田では使用しない。 4. キタジンPとフジワンは同一系統剤である。キタジンPの耐性菌の発生地域では当該薬剤の使用を控える。また、耐性菌発生を予防するため同一薬剤の連続使用を避け、他系統剤との輪用を図る。 5. キタジンPは紋枯病と小粒菌核病にも効果がある。 6. キタジンPの使用によってイネの稈長が短くなる場合があるが収量には影響がない。 7. パック剤、ジャンボ剤は黒ボク土や藻の発生の多い水田、又は著しく不整形の水田では効果が劣る場合がある。</p>

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項											
いもち病	穂、節いもちに対して出穂前15日頃	1. トルプロカルブ粒剤(3%) (サンブラス、ゴウケツ)を10a当り3kg散布する。	1. 予防的に散布した場合に有効である。 2. 散布に当っては水深を3cm以上とし、散布後7日間は止め水とする。 3. 漏水田では使用しない。 4. トルプロカルブを含有する薬剤は耐性菌の出現を回避するために、種子生産圃場での使用は控える。 5. 本剤はトルプロカルブ含有箱粒剤と有効成分が同一である。耐性菌の発生を防止するため、トルプロカルブを含有する薬剤は年1回の使用とし、体系防除を行う場合は別表6を参考にして作用性の異なる薬剤を用いる。 6. 本剤は葉いもちの上位葉進展への防除効果もある。											
	苗、葉いもちは初発期 穂、節いもちは穂ばらみ期と出穂期	1. アチーブ粉剤DL、ノンブラス粉剤DL、ビーム粉剤DL、フジワン粉剤DL、ブラシン粉剤DL、ラブサイド粉剤DLのいずれかを10a当り4kg散布する。 2. カスミン液剤、カスラブサイドゾル、トライフロアブル、ノンブラスフロアブル、ビームゾル、フジワン乳剤、ブラシンプロアブル、ラブサイドフロアブルのいずれかの1,000倍液、又はビーム水和剤75の4,000倍液のいずれかを分けつ期は10a当り100ℓ、穂ばらみ期及び出穂期は10a当り150ℓ散布する。	1. 苗、葉いもちが発見しだい薬剤散布をし、穂、節いもちは予防散布する。 2. 下表の葉色を超えると葉いもちに対する感受性が高まる傾向があるので注意する。 <table border="1" data-bbox="1066 1099 1428 1361"> <thead> <tr> <th>品種名</th> <th>SPAD値</th> <th>カラースケール値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>コシヒカリ</td> <td>35～40</td> <td>3.5～4.0</td> </tr> <tr> <td>あきたこまち</td> <td>40</td> <td>4.5</td> </tr> <tr> <td>風さやか</td> <td>35</td> <td>3.5</td> </tr> </tbody> </table> 3. 穂、節いもちの中～多発生が予想される場合は、穂ばらみ期と出穂期のほか、さらに出穂5日後と10日後に2回防除を行う。 4. 耐性菌の発生を防止するため、同一系統剤の連続使用を避け、別表6を参考に他系統剤との輪用を図る。 5. カスガマイシン及びMBI-D剤に対する耐性菌の発生地域では、当面該当薬剤の使用を控える。 6. ノンブラス、ビームは野菜の幼苗、なし(「二十世紀」、「幸水」、「新水」など)にかかると薬害の恐れがあるので注意する。 7. トライは、蚕に対して影響があるので桑葉にかからないように注意する。	品種名	SPAD値	カラースケール値	コシヒカリ	35～40	3.5～4.0	あきたこまち	40	4.5	風さやか	35
品種名	SPAD値	カラースケール値												
コシヒカリ	35～40	3.5～4.0												
あきたこまち	40	4.5												
風さやか	35	3.5												

			8. トライは、水産動植物（魚類）に影響を及ぼすので、養魚田では使用しない。
--	--	--	--

【別表 6】いもち病防除剤の系統分類

薬剤の系統	FRAC コード	主な薬剤名	一般名
MBI-D 剤 (メラニン生合成阻害剤－ 脱水酵素)	16. 2	アチーブ	フェノキサニル
MBI-R 剤 (メラニン生合成阻害剤－ 還元酵素)	16. 1	コラトップ ビーム ラブサイド	ピロキロン トリシクラゾール フサライド
MBI-P 剤 (メラニン生合成阻害剤－ ポリケチド合成酵素)	16. 3	サンブラス、ゴウケツ ゴウケツバスター、ハイ パーキック	トルプロカルブ
QoI 剤	11	オリブライト	メトミノストロビン
抵抗性誘導剤	P2	オリゼメート、ファースト オリゼ、Dr. オリゼ	プロベナゾール
	P3	アプライ、ブイゲット スタウト、ルーチン	チアジニル イソチアニル
	P8	ブーン	ジクロベンチアゾクス
有機リン剤	6	キタジン P	IBP
ジチオラン系剤	6	フジワン	イソプロチオラン
抗生物質剤	24	カスミン	カスガマイシン
	24+16. 1	カスラブサイド	カスガマイシン・フサライド
その他	U14+16. 1	ノンブラス	フェリムゾン・トリシクラゾール
	U14+16. 1	ブラシン	フェリムゾン・フサライド
	U16	トライ	テブフロキン

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
紋 枯 病	出 穂 30～10 日前	1. モンカット粒剤を 10a 当り 4kg、又 はリンバー粒剤 (1. 5%) を 10 a 当り 3kg 散布する。	1. 予防的に散布した場合に有 効であり、病斑が株元から上 位葉鞘に上りはじめる前(出 穂前 3 週間頃)に散布する。 発病の多い場合はさらに散 布剤で防除する。 2. 散布に当たっては水深を 3cm 以上とし、散布後 7 日間 は止め水とする。 3. 漏水田では使用しない。
	病勢進展初 期～出穂期	1. バシタック粉剤 DL、バリダシン粉 剤 DL、モンセレン粉剤 DL のい ずれかを 10 a 当り 4kg 散布する。 2. バシタック水和剤 7 5、バリダシン 液剤 5、モンカット水和剤 (25%) の 1, 000 倍液、モンセレンフロア ブルの 1, 500 倍液のいずれかを 10 a 当 り 1500 散布する。	1. 薬剤散布は病斑が株元から 上位葉鞘に上りはじめた時 (出穂前 2 週間頃)に行う。 発病が多い場合はさらに 7 ～10 日後に散布する。 2. 薬剤は株元によく付着する ように散布する。 3. バシタックは、蚕毒に注意す る。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
もみ枯細菌病 (穂枯症)	出 穂 3 週 間 前	1. オリゼメート粒剤を 10a 当り 3kg 散布する。	1. オリゼメート粒剤のみで、もみ枯細菌病 (穂枯症) を防除することは難しいため、苗腐敗症の防除を徹底する。 2. 散布にあたっては水深を 3cm 以上とし、散布後 7 日間は止め水とする。 3. 本病の発生生態および防除に関しては、長野県農業関係試験場のホームページ ( <a href="https://www.agries-nagano.jp/research_result_search">https://www.agries-nagano.jp/research_result_search</a> ) に公開されている「採種栽培のためのもみ枯細菌病防除の指針」を参照する。
白葉枯病	出 穂 4～3 週間前	1. オリゼメート粒剤を 10a 当り 3～4kg 散布する。	1. 高温、多湿の時や浸水、台風などの時に発生が多い。 2. いもち病の同時防除ができる。 3. 散布にあたっては水深を 3cm 以上とし、散布後 7 日間は止め水とする。
	穂ばらみ期 (出穂 10 日前まで)	1. Z ボルドー粉剤 DL を 10 a 当り 3～4 kg を散布する。	1. Z ボルドーは出穂期間近、又は以降に散布すると葉害を生じるので、出穂 10 日前までの使用を厳守する。 2. 穂ばらみ期～出穂期にかけて降雨が多いと発生しやすい。 3. 多肥で遅効きする場合に発生が多い。 4. Z ボルドー、は、蚕毒に注意する。
稲こうじ病	出 穂 15 日 前 頃	1. モンガリット粒剤を 10a 当り 3kg 散布する。	1. 本剤の稲こうじ病への防除効果は出穂前 2～3 週間(幼穂長が約 1～5cm)の散布が最も高い。 2. 散布予定圃場の平年の出穂期から当年の出穂期を予測し、出穂 15 日前となる日を散布予定日とすると散布遅れが生じにくい。 3. 本剤は紋枯病も同時防除できるがリンバー粒剤 (1.5%) よりやや効果が劣る。 4. 散布にあたっては水深を 3cm 以上とし、散布後 7 日間は止め水とする。 5. 薬剤耐性菌発達回避のため、本剤の連用は控え、作用性の異なる薬剤を用いる。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
変色米 (エピコッカム菌)		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 畦畔の雑草、刈草の堆積は病原菌の増殖場所となるため、常に圃場周辺の畦畔管理を心掛ける。</li> <li>2. 倒伏や刈遅れは発生を助長するので適正施肥、適期刈り取りを行う。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 出穂期以降の低温、黄熟期以降の多雨で発生が多い。</li> <li>2. 収穫後の乾燥調整で籾水分が多いと被害が大きくなる。</li> </ol>
イネミズゾウムシ	本田初期 6月上旬 (幼虫ふ化初期)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. トレボン粒剤を10a当り2kg散布する。</li> <li>2. トレボンサーフを10a当り300ml、田面水に滴下する。</li> <li>3. なげこみトレボンを10a当り6個(1個50ml)畦畔から均等に投げ入れる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 苗箱施薬しても発生の多い場合(株当り成虫1頭以上)は本田施薬を検討する。</li> <li>2. 幼虫ふ化初期は田植10~20日後である。</li> <li>3. 水深3cm以上の湛水状態で散布し、7日間は止め水とする。漏水田では使用しない。</li> <li>4. トレボンサーフ、なげこみトレボンは、5葉期以降に使用する。散布方法は総括注意を参照。</li> <li>5. トレボンサーフはイネの茎葉部に直接かからないよう田面水に滴下する。</li> <li>6. <b>トレボンは蚕毒及び魚毒に特に注意する(特別指導事項参照)。</b></li> </ol>
ツマグロヨコバイ	出穂直前	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ジノテフラン粒剤(アルバリン、スタークル)を10a当り3kg散布する。</li> <li>2. アプロード水和剤の1,000倍液を10a当り150ℓ散布する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 出穂初期に被害が多い。</li> <li>2. 株元にも十分散布する。</li> <li>3. 幼虫発生期に散布する。</li> <li>4. 粒剤は水深3cm以上の湛水状態で散布し、7日間は止め水とする。漏水田では使用しない。</li> <li>5. 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統薬剤の連用を避ける。</li> <li>6. <b>アルバリン、スタークルは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。</b></li> </ol>

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
ヒメトビウ ンカ 〔縞葉枯病 黒すじ萎 縮病〕	6月上旬 ～7月上旬	1. アプロード水和剤の1,000倍液、マ ラソン乳剤の2,000倍液のいずれか を10a当り100ℓ散布する。 2. ジノテフラン粒剤（アルバリン、ス タークル）を10a当り3kg散布する。	1. 圃場や雑草で増殖した第 1世代成虫が水田に侵入す る。 2. 多発生の場合は散布回数を 増す。 3. 粒剤は水深3cm以上の湛水 状態で散布し、7日間は止め 水とする。漏水田では使用し ない。 4. 粒剤及びアプロードは幼虫 発生期に散布する。 5. <b>アルバリン、スタークルは蚕 毒に特に注意する（特別指導 事項参照）。</b>
イネヒメハ モグリバエ	5月下旬 ～6月上旬 （植付後10 日以内）	1. スミチオン乳剤2,500倍液を10a当 り100ℓ散布する。	1. 第3世代による被害が発生 しやすいので、遅植では7月 月上旬に防除する。
イネドロオ イムシ （イネクビ ホソハム シ）	6月上旬～ 中旬 （成虫発生 盛期）	1. ジノテフラン粒剤（アルバリン、ス タークル）を10a当り3kg、又はト レボン粒剤を2kg散布する。 2. トレボンサーフを10a当り300ml、 田面水に滴下する。 3. なげこみトレボンを10a当り6個（1 個50ml）畦畔から均等に投げ入れ る。	1. 幼虫発生後は効果が劣るの で防除時期を守る。 2. 水深3cm以上の湛水状態で 散布し、7日間は止め水とす る。漏水田では使用しない。 3. トレボンサーフ、なげこみト レボンは移植後20日以降 で、5葉期以降に使用する。 散布方法は総括注意を参照 する。 4. トレボンサーフはイネの茎 葉部に直接かからないよう 田面水に滴下する。 5. <b>スタークル、アルバリンは蚕 毒に、トレボンは蚕毒及び魚 毒に特に注意する（特別指導 事項参照）。</b>
イネドロオ イムシ （イネクビ ホソハム シ）	6月中旬 （幼虫加害 初期）	1. トレボン粉剤DL、MR、ジョーカー 粉剤DLのいずれかを10a当り3kg 散布する。 2. トレボン乳剤の2,000倍液を10a当 り100ℓ散布する。	1. 標高の低い地帯は発生時期 が早い。 2. 発生期間が長引く場合には 苗箱施薬していても本田防 除を検討する。 3. <b>トレボンは蚕毒及び魚毒に、 MR、ジョーカーは蚕毒に特 に注意する（特別指導事項参 照）。</b> 4. 粉剤はドリフトしやすいの で蜜蜂等への危被害に注意 する（特別指導事項参照）。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
イナゴ (コバネイナゴ)	7月上旬 ～7月下旬	1.トレボン粉剤DL、MR. ジョーカー粉剤DLのいずれかを 10a 当り 4kg 散布する。 2.トレボン乳剤の 2,000 倍液を 10a 当り 100ℓ 散布する。	1.トレボン、MR. ジョーカーは中齢期以降でも効果がある。 2.トレボンは蚕毒及び魚毒に、MR. ジョーカーは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 3.粉剤はドリフトしやすいので蜜蜂等への危被害に注意する(特別指導事項参照)。
ニカメイチュウ	第 1 世 代 〔発蛾最盛期〕 10～15 日後	1.スミチオン乳剤の 1,500 倍液を 10a 当り 100ℓ 散布する。 2.パダン粒剤 4 を 10a 当り 3kg 散布する。	1.早植栽培に発生が多い。 2.薬剤散布適期は葉鞘変色茎の発生初期である。北信地区では通常 6 月下旬。 3.薬剤散布時期が 7 月下旬～8 月上旬となる場合は散布量を増やす。 4.粒剤は水深 3cm 以上の湛水状態で散布し、7 日間は止め水とする。漏水田では使用しない。 5.発生が長期になる地帯では 2 回防除する。 6.パダンは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。
	第 2 世 代 〔発蛾最盛期〕 から 7 日以内	1.スミチオン乳剤の 1,000 倍液を 10 a 当り 150ℓ 散布する。	1.北信地区では通常 8 月上旬が防除適期である。
フタオビコヤガ (イネアオムシ)	7月下旬 ～8月上旬	1.ジノテフラン粉剤DL (アルバリン、スタークル) を 10a 当り 3kg 散布する。	1.蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 2.粉剤はドリフトしやすいので蜜蜂等への危被害に注意する(特別指導事項参照)。
イネツトムシ (イチモンジセセリ)	7月下旬 ～8月上旬	1.トレボン粉剤DLを 10a 当り 4kg 散布する。	1.6 月 20 日以後の晩植やイネの生育が遅れた場合に多発する。 2.晩植地帯では 8 月上旬に 10 株で 3 頭以上の幼虫がいる場合に実害が発生する。 3.トレボンは蚕毒及び魚毒に注意する(特別指導事項参照)。 4.粉剤はドリフトしやすいので蜜蜂等への危被害に注意する(特別指導事項参照)。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
セジロウンカ トビイロウ ンカ	7月下旬 ～8月中旬	1. アプロード水和剤の 1,000 倍液を 10a 当り 150ℓ 散布する。 2. ジノテフラン粒剤（アルバリン、スタークル）を 10a 当り 3kg 散布する。	1. 発生予察情報に注意する。 2. 7月下旬から8月中旬に水田内部の株元を調べ、成幼虫の発生程度を確認する。 3. 液剤は株元に届くよう散布する。 4. 粒剤は水深 3cm 以上の湛水状態で散布し、7日間は止め水とする。漏水田では使用しない。 5. 粒剤及びアプロードは幼虫発生期に散布する。 6. <b>アルバリン、スタークルは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。</b>
カメムシ類 (斑点米)	出穂期	1. キラップ粒剤を 10a 当り 3kg 散布する。	1. アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、アカヒメヘリカメムシ、クモヘリカメムシなどが主な種類である。 2. コバネヒョウタンナガカメムシの発生地ではスミバッサを用いる。 3. トゲシラホシカメムシ類に対しては、スミチオンなどの有機リン剤の効果が安定している。 4. 圃場周辺のイネ科雑草（特にイタリアンライグラス、スズメノカタビラ、メヒシバ等）が発生源になるので、草刈りを徹底する。なお、出穂直前の畦草刈りは出穂 2 週間前頃に行う。 5. 粒剤は湛水状態（水深 3～5cm）で散布し、散布後 7 日間は止め水とする。 6. 常発地では、7～10 日後に追加散布する。 7. 収穫期が近いので農薬使用基準を遵守する。 8. <b>アルバリン、エクシード、キラップ、スタークル、ダントツは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。</b> 9. 粉剤はドリフトしやすいので蜜蜂等への危被害に注意する。また、アルバリン、エクシード、キラップ、スタークル、ダントツについても同様に蜜蜂等への危被害に注意する（特別指導事項参照）。
	出穂 7 日後	1. ジノテフラン粒剤（アルバリン、スタークル）、又はダントツ粒剤を 10a 当り 3kg 散布する。	
	出穂 10 日後	1. スミバッサ粉剤 20DL を 10a 当り 4kg 散布する。 2. ジノテフラン粉剤 DL（アルバリン、スタークル）を 10a 当り 3kg 散布する。 3. スミチオン乳剤、スミバッサ乳剤 75 のいずれかの 1,000 倍液を 10a 当り 150ℓ、又はエクシードフロアブルの 2,000 倍液を 10a 当り 100ℓ 散布する。	



## 総括注意

1. トレボンは発芽前の桑樹にかかった場合でも蚕に悪影響があるので給桑しない。
2. トレボンサーフは10a当り20か所程度で滴下する方法の他、畦畔際のみで滴下する方法、ボトルを支柱などに固定し、逆にして水田内（風上）に立てる方法で処理できる。散布は必ず専用口栓を使用して行う。
3. 1キロ粒剤の散布方法
  - (1) 1キロ剤は従来の3キロ剤に比べ、吐出しやすい性質があるので、手回式散粒機などでは撒き過ぎないように注意する。
  - (2) 1キロ剤を初めて使用する場合は、事前に散布機の吐出量の確認調整を行ってから散布すること。
  - (3) 背負式の動力散布機使用の場合は、市販の1キロ粒剤用噴頭を用いると散布しやすい。
4. 水田には蜜蜂が水や花粉を求め飛来することがあるので、蜜蜂を放飼している地域では殺虫剤の蜜蜂に対する危被害防止に注意する（特別指導事項参照）。
5. 育苗ハウス内での苗箱施薬剤の処理については、育苗ハウスで育苗後に他作物を栽培する場合、育苗ハウスの土壌全面にビニールシートを敷く、育苗箱からこぼれないように丁寧に処理するなど後作物への影響を防止する。
6. ドリフト対策（I 防除基準活用上留意する事項 3. ポジティブリスト制度 参照）
  - (1) 圃場及び周辺の立地条件を確認し、近接作物や住宅には特に注意し、これらに危被害が及ばないようにする。
  - (2) 農薬の剤型によりドリフトの程度は大きく異なるため、なるべくドリフトしにくい剤型を選択するようにする。一般的には粉剤、液剤、粒剤の順にドリフトは減少する。
  - (3) 粉剤（DL剤を含む）は少しの風でもドリフトしやすいため、①風を利用した流し散布は絶対に行わない、②風の無い早朝の散布とする、などの基本事項を徹底する。液剤でも風の無い時に散布するなどの基本を徹底する。

## (2) 飼料用イネ（WCS用、飼料米用）

### 【WCS（発酵粗飼料）用イネ】

1. 使用できる農薬は、「稲発酵粗飼料生産・給与技術マニュアル（（一社）日本草地畜産種子協会）」及び「稲発酵粗飼料用稲に係る農薬使用について（農水省畜産局通達 令和4年1月28日及び令和4年3月14日）」に掲載されている。
2. マニュアルに記載されている農薬のうち、本県の水稲（食用イネ）で普及に移されている薬剤は下表のとおりである。
3. 各薬剤の使用方法は、本防除基準の水稲（食用イネ）の項を参照する。なお、殺虫殺菌剤については、同一有効成分量の殺菌剤または殺虫剤で普及に移されているため、それぞれの薬剤の注意事項を参照する。
4. WCS用イネでも農薬の使用時期（収穫〇日前まで）はそのまま適用される。黄熟期に収穫する場合、防除期間が食用イネよりも1週間～10日間程度早まることに留意する。

### WCS用イネで使用可能な薬剤

#### ・種子消毒

区分	薬剤名
殺菌剤	エコホープ
	エコホープDJ
	スターナ水和剤
	タフブロック
	テクリードCフロアブル
	トリフミン乳剤
	ヘルシードTフロアブル
	モミガードC水和剤

#### ・播種前～播種時

区分	薬剤名
殺菌剤	ダコニール1000
	ダコニール粉剤
	ダコレート水和剤
	タチガレエースM液剤
	タチガレエースM粉剤
	タチガレン液剤
	タチガレン粉剤
	ナエファインフロアブル
フジワン粒剤	
殺虫剤	アドマイヤー水和剤 (直播栽培の過酸化カルシウム剤との同時湿粉衣に限る)

#### ・苗箱施薬剤（殺菌剤・殺虫剤）

区分	薬剤名	区分	薬剤名
殺菌剤	Dr. オリゼ箱粒剤	殺虫剤	アドマイヤー箱粒剤
	エバーゴル箱粒剤		アドマイヤーCR箱粒剤
	チアジニル含有箱粒剤 【アプライ、ブイゲット】		ガゼット粒剤
	デジタルコラトップ箱粒剤		ギャング粒剤
	ファーストオリゼ箱粒剤		グランドオンコル粒剤
	リンバー箱粒剤		ジノテフラン箱粒剤【アルバリン、スタークル】
			ダントツ箱粒剤
	バダン粒剤4		
	バダン粒剤SG水溶剤（側条施用）		
	パディート箱粒剤		
	バリアード箱粒剤		
	フェルテラ箱粒剤		
	プリンス粒剤		

・ 苗箱施薬剤（殺虫殺菌剤）

区分	薬剤名	農薬の種類
殺虫殺菌剤	Dr. オリゼダントツ箱粒剤	クロチアニジン・プロホパノール粒剤
	ダントツオリゼメート24箱粒剤	
	Dr. オリゼパディート粒剤	シアントラニリブ ロール・プロホパノール粒剤
	Dr. オリゼパディート粒剤（側条施用）	
	ファーストオリゼパディート粒剤	クロラントラニリブ ロール・チフルサミト・プロホパノール粒剤
	Dr. オリゼフェルテラグレータム粒剤	
	Dr. オリゼフェルテラ粒剤	クロラントラニリブ ロール・プロホパノール粒剤
	Dr. オリゼフェルテラ粒剤（側条施用）	
	ファーストオリゼフェルテラ粒剤	スピノサト・フィプロニル・プロホパノール粒剤
	Dr. オリゼプリンススピノ粒剤10	
	ファーストオリゼプリンススピノ粒剤10	フィプロニル・プロホパノール粒剤
	Dr. オリゼプリンス粒剤10	
	ファーストオリゼプリンス粒剤10	シアントラニリブ ロース・チアジニル粒剤
	アプラインパディート粒剤	
	ブイゲットパディート粒剤	クロラントラニリブ ロール・チアジニル粒剤
	アプラインフェルテラ粒剤	
	ブイゲットフェルテラ粒剤	フィプロニル・チアジニル粒剤
	アプラインプリンス粒剤10	
	コメホープ箱粒剤	イミダクロプリド・イソチアニル・ベンゾフルフェン粒剤
	ブイゲットプリンス粒剤10	
	エバーゴルフオルテ箱粒剤	イミダクロプリド・クロラントラニリブ ロール・イソチアニル・ベンゾフルフェン粒剤
	エバーゴルフプラス箱粒剤	
	エバーゴルフワイド箱粒剤	クロチアニジン・クロラントラニリブ ロール・イソチアニル・フラメトヒル粒剤
	サイクルヒット箱粒剤	
	フルターボ箱粒剤	クロラントラニリブ ロール・ベンゾフラカルブ・プロホパノール粒剤
	ジャッジフェルテラ箱粒剤	
	ジャッジ箱粒剤	イミダクロプリド・スピノサト・イソチアニル・チフルサミト粒剤
	シャリオ箱粒剤	
	ルーチンアドスピノGT箱粒剤	クロラントラニリブ ロール・トリフルメゾヒリム・イソチアニル・ベンゾフルフェン粒剤
	スクラム箱粒剤	
	スタウトダントツ箱粒剤	クロチアニジン・イソチアニル粒剤
	ボクシー粒剤	
	スタウトパディートDX箱粒剤	クロチアニジン・シアントラニリブ ロール・イソチアニル粒剤
	スタウトパディート箱粒剤	
	ツインパディート箱粒剤	シアントラニリブ ロール・イソチアニル粒剤
	ルーチンデュオ箱粒剤	
	ルーチンパンチ箱粒剤	シアントラニリブ ロール・トルブコルブ粒剤
	ツインキック箱粒剤	
	ツインターボフェルテラ箱粒剤	クロチアニジン・クロラントラニリブ ロール・イソチアニル粒剤
	デジタルコラトップアクタラ箱粒剤	
	ハコガード粒剤	クロラントラニリブ ロール・トリフルメゾヒリム・チアジニル・チフルサミト粒剤
	ブイゲットハコレンジャーL粒剤	
ハコナイト粒剤	クロラントラニリブ ロール・ヒメトロジン・チフルサミト・プロホパノール粒剤	
ビルダーフェルテラチェスGT粒剤		
ビルダープリンスグレータム粒剤	フィプロニル・チフルサミト・プロホパノール粒剤	
ブイゲットアドマイヤー粒剤		
ブイゲットプリンスリンパーL粒剤	イミダクロプリド・チアジニル粒剤	
ブーンゼクテラ箱粒剤		
	クロラントラニリブ ロール・トリフルメゾヒリム・ジクロベンチアゾクス粒剤	

区分	薬剤名	農薬の種類
殺虫殺菌剤	ブーンパディート箱粒剤	シアントラニリブ ロール・ジクロベンチアゾクス粒剤
	ブーンレパード箱粒剤	テトラニリブ ロール・ジクロベンチアゾクス・ヘンフルフェン粒剤
	プリンスリンバー箱粒剤	フィプロニル・フラメトビール粒剤
	フルスロトル箱粒剤	シアントラニリブ ロール・トリフルメゾビリム・イソチアニル・ヘンフルフェン粒剤
	ボクシーS P粒剤	クロチアジメトスビネトラム・イソチアニル粒剤
	箱王子粒剤	
	ヨーバルUG箱粒剤	テトラニリブ ロール・ヒメトロジン・イソチアニル粒剤
	ヨーバルトップ箱粒剤	テトラニリブ ロール・イソチアニル粒剤
	ヨーバルパワーEV箱粒剤	テトラニリブ ロール・ヒメトロジン・イソチアニル・ヘンフルフェン粒剤
	ヨーバルプライムEV箱粒剤	テトラニリブ ロール・イソチアニル・ヘンフルフェン粒剤
	ルーチンアドスピノ箱粒剤	イミダクロプリトスビネトラム・イソチアニル粒剤
	ルーチンアドマイヤー箱粒剤	イミダクロプリトスビネトラム・イソチアニル粒剤
	ルーチンエキスパート箱粒剤	イミダクロプリトスビネトラム・イソチアニル・ヘンフルフェン粒剤
	ルーチントレス箱粒剤	イミダクロプリトスビネトラム・クロラントラニリブ ロール・イソチアニル粒剤
	ルーチンブライト箱粒剤	シアントラニリブ ロール・イソチアニル・ヘンフルフェン粒剤
	箱維新粒剤	クロラントラニリブ ロール・トリフルメゾビリム・イソチアニル・フラメトビール粒剤
	箱将軍粒剤	
	箱大臣粒剤	クロチアジメトスビネトラム・イソチアニル・フラメトビール粒剤
防人箱粒剤	クロラントラニリブ ロール・トリフルメゾビリム・イソチアニル粒剤	

・ 本田施用

区分	薬剤名	区分	薬剤名
殺菌剤	Zボルドー粉剤DL	殺虫剤	アブロード水和剤
	アチーブ粉剤DL		ジノテフラン粉剤DL [アルバリン、スタークル]
	オリゼメートリンバー粒剤		ジノテフラン粒剤 [アルバリン、スタークル]
	オリゼメート粒剤		スミチオン乳剤
	コラトップジャンボP		スミバツサ粉剤20DL
	コラトップリンバー粒剤		ダントツ粉剤DL
	コラトップ粒剤5		トレボン乳剤
	トライフロアブル		トレボン粉剤DL
	トルプロカルブ粒剤 (サンブラス、ゴウケツ)		トレボン粒剤
	トルプロカルブ粒剤 (サンブラス、ゴウケツ)		パダン粒剤4
	バンタック水和剤75		パダン粒剤4
	フジワンモンカット粒剤		
	フジワン乳剤		
	フジワン粉剤DL		
	フジワン粒剤		
	ブラシフロアブル		
	ブラシン粉剤DL		
	モンカット粒剤		
	モンカット水和剤 (25%)		
	ラブサイドフロアブル		
リンバー粒剤			

## 【飼料米用イネ（玄米や粳米で給餌するもの）】

- 飼料米用イネでは稲で適用登録がある農薬が使用可能であるが、下記①～③に留意する必要がある。その上で、本県で一般水稻対象に普及に移されている薬剤を使用する。
  - ① 粳米のまま、もしくは粳殻を含めて家畜に給餌する場合は、出穂期以降の農薬散布は控えること。
  - ② 出穂期以降に農薬を使用する場合は、粳摺りをして玄米で家畜に給餌すること。
  - ③ 但し、①②の措置を要しない薬剤もあり、その中で普及薬剤は表1のとおりである。
- 飼料米用イネにおける農薬使用の詳細は、「飼料として使用する粳米への農薬の使用について（農水省消費安全局通達 令和3年1月14日）」を参照のこと。

・飼料米用イネ（粳米もしくは粳殻を給餌）で出穂期以降に使用可能な普及薬剤

区分	薬剤名	区分	薬剤名
殺菌剤	トライフロアブル	殺虫剤	アプロード水和剤
	バンタック水和剤75		キラップ粒剤
	バンタック粉剤DL		ジノテフラン粉剤DL[アルバリン、スタークル]
	フジワン乳剤		ジノテフラン粒剤[アルバリン、スタークル]
	フジワン粉剤DL		ダントツ粒剤
	モンカット水和剤		

## 【飼料用イネ（WCS用、飼料米用）の病害虫防除に関する注意事項】

- 抵抗性品種や病害虫発生予察を活用した的確かつ必要最小限の防除対策を基本とする。
- 食用イネとは防除対象や被害許容水準が異なる場合が考えられるが、飼料用イネ圃場における病害虫発生が周辺の食用イネに影響を及ぼさないように配慮する。
- 高収量を目指した多肥栽培、食用イネとは異なる遺伝的背景を持つ品種等により、飼料用イネでは基本的に病害虫の発生リスクが高い。また、食用イネ品種とは異なる病害虫発生様相になる場合も予想される。主要な飼料用イネ品種の病害虫抵抗性に関する特性（表2）や、下記にこれまで飼料用イネで問題になった主な病害虫について記載したので参考にする。
  - (1) いもち病  
飼料用イネ品種の多くは、外国稲由来の抵抗性遺伝子を有しているため、導入当初はいもち病の発生は認められない。しかし、栽培面積、栽培年数によっては、抵抗性崩壊の危険が生ずるため、十分注意する。
  - (2) 紋枯病  
多肥栽培を行いイネの繁茂量を大きくする必要のある飼料用イネでは、紋枯病の発生が増加することが考えられる。出穂期が高温時期とならないように品種や作型を検討するなどの耕種的対策を基本とするが、多発生時には薬剤防除で補完する。
  - (3) 稲こうじ病  
飼料用イネは品種特性により発生が問題となることがあるので留意する。
  - (4) ヒメトビウンカ（縞葉枯病）・セジロウンカ  
飼料用イネ品種にはインディカ品種の系統があり、これらではウンカ類の産卵に対する生態防御反応が劣るため、ウンカ類が増殖しやすい。そのため、セジロウンカによる坪枯れ被害やヒメトビウンカが媒介する縞葉枯病に注意する。
  - (5) イネツトムシ（イチモンジセセリ）  
移植時期が遅く、多肥栽培になることが多いため、イネツトムシの被害を受けやすい。イチモンジセセリの発生予察情報（病害虫防除所ホームページに掲載）に留意すること。
  - (6) 斑点米カメムシ類  
食用イネと隣接する圃場では、飼料用イネ栽培圃場がカメムシ類の発生源とならないよう、水田内のイネ科雑草及び畦畔雑草の管理を適切に実施する。

表2 主要な飼料用イネ品種の病害虫抵抗性に関する特性

品種名	葉いもち真性抵抗性遺伝子	圃場抵抗性		縞葉枯病耐病性	白葉枯病	虫害
		葉いもち	穂いもち			
リーフスター	<i>Pia</i>	中・極強	中	罹病性	中	—
たちすずか	<i>Pita, Pib, Pi20(t)</i>	弱	—	罹病性	(極強)	—
タチアオバ	<i>Pia, Pii</i>	中	やや強	抵抗性	やや弱	—
モミロマン	不明	不明	—	罹病性	弱	—
べこあおば	<i>Pita-2, (Pia)</i>	やや弱	弱	罹病性	弱	—
べこごのみ	<i>Pib, Pik</i>	強	中	罹病性	弱	—
クサホナミ	<i>Pia, Pii, Pik+α</i>	—	—	抵抗性	やや強	ニカメイガに弱い

上記には本県の飼料作物奨励品種でないものも含まれる。

表3 多収性専用品種の病害虫抵抗性に関する特性

品種名	葉いもち真性抵抗性遺伝子	圃場抵抗性		縞葉枯病耐病性	白葉枯病	虫害
		葉いもち	穂いもち			
ふくおこし	<i>Pia, Pib, Pik</i>	(極強)	(強)	—	—	—
(参考) コシヒカリ	+	弱	弱	—	(中)	—

注) 評価欄の ( ) はいもち病菌系の変化により抵抗性が大きく変わる可能性を有することを示す。